

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	基調講演 両大学の社会貢献課題としての記憶の重要性
Author(s)	越智, 光夫
Citation	ぶらくしす , 23 : 5 - 9
Issue Date	2022-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/52227
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052227
Right	
Relation	



基調講演

越智光夫（広島大学学長）

こんにちは。そして、ミュンスターの皆さまにはおはようございます。

広島大学の学長、越智光夫です。

本日は、大学の社会貢献課題としての記憶という、非常に重要なテーマでお話をする機会をいただき、学長のヨハネス・ヴェッセルス先生をはじめ、本日のワークショップ開催にご尽力された関係各位の皆様に感謝いたします。

本日は4つのポイントで講演を進めさせていただきます。

1. 広島大学のアイデンティティと記憶
2. 広島大学の社会貢献 ～ 建学の理念を実現する教育と研究
3. 新たな記憶 《ヒロシマとフクシマ》
4. 未来へつなぐ記憶の遺伝子

1. 広島大学のアイデンティティと記憶

広島大学の歴史は原爆投下以前にさかのぼります。広島大学は、日本で最も多くの前身校を持つ大学です。その起源は1874年に設立された白島学校に遡ります。

その後、1902年に広島高等師範学校、1929年に広島文理科大学、1945年に広島県立医学専門学校が設立されて、今日の広島大学の礎となりました。

これら前身校の多くは、爆心地から4km以内の広島市街地にありました。前身校の多くで留学生を含む多数の学生生徒や教職員が犠牲になり、死没者数は1945年末時点で676名にのぼりました。

広島大学にはしかし、原爆あるいは戦争の被害者という側面だけでなく、加害者としての側面もありました。

当時、広島文理科大学、広島高等師範学校にはアジアからの留学生が在籍していました。中国、モンゴルからの留学生は、被爆時に37人以上おり、このうち3人の被爆死が確認されています。また、当時日本が南進政策を進めていた東南アジアの各地から選抜・招致された「南方特別留学生」2名（ともに現マレーシア出身）が被爆により死亡しました。

もちろんこの出来事においては広島大学が加害者であるとは言えないでしょう。しかし、当時、哲学者西晋一郎（1873-1943）が、広島文理科大学国体学講座（1938年創設）の教授

として、戦時体制を思想的に支えるポジションにあったことを考えれば、事情は複雑です。

こうした暗い時代の惨禍の記憶が生々しく残る 1949 年 5 月に、広島県民の熱い思いを受けながら誕生したのが広島大学です。原爆の記憶はまさに広島大学の原点です。それを象徴しているのが、前文部大臣で、本学初代学長となった森戸辰男氏が開学式（1950 年 11 月 5 日）で行った次のような宣言であり、これが現在の本学建学の精神「自由と平和」の原型となりました。

「民主的で平和な『一つの世界』を待望するわれわれが、「民主的で平和な『一つの祖国』」を建設する精神的基礎をなすために、「自由で平和な『一つの大学』を実現」することを目指す。」

この理念を実現する第一歩として森戸初代学長は、復興再建への協力を要請する手紙を、世界 470 の大学に送り、図書寄贈とともに緑化のための苗木・種子の提供を呼びかけました。森戸氏はその思いをこう述べています。

「焼けただれた赤錆色の大学でなく、みずみずしい緑色の大学にしたいと思い立ちました。緑こそ生々の色、希望の色、平和の色と信じたからです。」

この呼びかけに対し、アメリカ、ドイツ、インドなどの大学からおよそ 100 種 260 本の苗木と種子 930 袋余りが送られてきました。この寄付をもとに東千田キャンパス正門前に、原爆から復興する広島大学の象徴として植えられたのがフェニックスです。

外ならぬミュンスター大学からも、関係図書と苗木・種子の提供の申し出がありました。近年緊密度を増したミュンスター大学と広島大学との連携が、こうした記憶を呼び起こし、両大学のアイデンティティの構成要素としてとらえなおす機会を与えてくれたと言えます。

広島大学の象徴であるフェニックスは、このように、ヤシ科の植物の葉を意味し、学章にも図案化されています。そしてフェニックスのもう一つの意味である「不死鳥」を図案化したのが、「フェニックスマーク」とマスコットキャラクター「ひろティー」です。

2. 広島大学の社会貢献：建学の理念を実現する教育と研究

すでに原爆投下直後から、広島大学の前身校の研究者・教職員は、被爆調査と被爆者の治療救済に尽くしました。

こうした活動の一つの核が、1958 年に設置された原子放射能基礎医学研究施設であり、それを引き継いだ現在の原爆放射線医科学研究所（2002～）です。同研究所は大学所属の研究所として、放射線医学分野において日本最大の規模を誇り、同分野の研究者・医師養

成に当たっています。また、1975年には平和科学研究センターが設置され、2002年に広島大学平和センターと改称されました。

その成果の一つが、1994年から世界に先駆けて、この二つの研究センターが共同で実施したカザフスタン協和国・セミパラチンスク核実験場における放射線生物物理学および医学的研究、さらには近郊住民の精神的影響とその背景に関する調査です。

平和の大学を具体化したのが、広島大学新入生必修カリキュラム「平和科目」（原爆、貧困、人口問題・環境など30科目から2単位選択）です。この授業では原爆ドームなど、平和とモニュメントの見学、平和に関する動画視聴及び体験記の閲覧を通して作成する平和を考えるレポートも併せて提出してもらっています。2,500名の新入生の中から毎年優秀者10名程度を表彰しています。

さらに、各国政府代表者や在京大使による平和をテーマにした講演会「ピース・レクチャー・マラソン」も開始しました。

また、平和研究の成果は附属学校での教育実践にも生かされています。

こうした研究・教育活動の中から生まれたのが、欧州の超巨大研究資金プログラム Horizon 2020（2014-2020で総額12兆円）へのミュンスター大学との共同申請「現代ヨーロッパにおける戦争の文化的遺産」でした。このプロジェクトには広島大学の人文社会系研究者の多くが参集し、採択には至らなかったものの高評価を得たことは記憶に新しいところです。

3. 新たな記憶 《ヒロシマとフクシマ》

2011年3月11日、東日本大震災が日本の東北部を襲いました。

地震によって引き起こされた津波が東京電力福島第一原子力発電所を襲いました。

翌3月12日には、原発近郊住民の避難が始まりました。

広島大学では、原爆被害からの復興支援の経験を生かすべく、当時病院長であった私は陣頭指揮の任に当たりました。

地震発生から5時間後には、広島大学病院災害派遣医療チームDMATを派遣、12日には緊急被ばく対策委員会を設置し、ただちに「緊急被ばく医療チーム」の派遣を開始しました。

2011年3月12日以来、広島大学は、「緊急被ばく医療チーム」として、のべ1,300人以上の支援スタッフを継続的に派遣してきました。

私自身が、3月30日に福島を訪れ、佐藤県知事とその支援方策に関して話し合いをしました。広島大学の神谷先生は、2011年から福島県立医科大学の副学長を兼任し、10年間にわたり毎週1回、県民健康調査のために福島入りして復興に寄与しています。

福島において、広島大学はリスク・コミュニケーションやオフサイトセンターの支援など、さまざまな復興支援の取り組みを行ってきました。

2016年には、広島大学病院内に「福島医療支援センター」を設置し、本院医師が福島県

立医科大学に出向して復興に協力してきました。また、福島県立医科大学の「ふたば救急総合医療支援センター」には血液内科、循環器内科の専門医、救急医が常駐しています。

医療・放射線系だけでなく、震災によって壊れた自然環境、住民の皆さんの心身の健康や暮らし、社会システムを取り戻すために、本学の自然科学系、人文社会科学系、学生ボランティアも総力を挙げて福島の復興に取り組んでまいりました。

これらの活動と並んで、広島大学では、震災後いち早く2012年には、放射線災害科学の分野では世界で唯一の大学院博士課程プログラム「放射線災害復興を推進するフェニックスリーダー育成プログラム」を設置し、IAEA（国際原子力機構）から直接学生への支援を受けながら、とくにアジアでの放射線利用の急拡大に対応する人材育成を行っています。

今後も、IAEA、ICRP、CEPNなどの国際機関や、福島県立医科大学、長崎大学などとの連携の下、放射線災害復興分野において、学際的なスキルを持つグローバルリーダーを育成していきたいと考えています。

4. 未来へつなぐ記憶の遺伝子

世界最初の被爆地に開学した広島大学は「平和を希求する国際的教養人」を輩出しなければなりません。学術的立場から核被害の実態を解き明かして世界に発信するとともに、核被害者に寄り添い、復興に貢献することは、本学に課せられたミッションです。

このミッションを具体化し、さらに拡充するために策定されたのが“SPLENDOR PLAN 2017”です。

世界中で従来の規範意識が変化し、ポピュリズムが世界を席卷し、価値観が一層多様化しています。今こそ、知の拠点である大学には、科学のパラダイム転換へのアクションが求められています。広島大学は、このような状況を重く受け止めています。そして、これまで以上に、人間、社会、文化、食料、環境、自然の持続性に関連する全ての既存の学問領域を包含し、平和の構築に限りなくチャレンジし、働きかける新しい平和科学の理念「持続可能な発展を導く科学」の創生を目指した活動を展開して、100年後にも世界で光り輝く大学としての責務を果たすことを宣言したのです。

この使命を果たし、平和の理念を世界へと一層押し広げるために、広島大学は2018年にアリゾナ州立大学（ASU）と学術・教育交流協定を締結し、スマートシティ、長寿、ニューテクノロジーのガバナンスなどにおいて研究交流を進めています。

2020年7月には、アリゾナ州立大学を広島大学の学内に設置する覚書を締結しました。これは日本の国立大学では初となる取り組みです。修学モデルとしては、前半2年間で広島大学で、後半2年間でアリゾナ州立大学のキャンパスで過ごす2+2モデルで、2022年8月に学生受け入れを開始する予定です。

また、2019年には「広島大学 FE・SDGs ネットワーク拠点」（NERPS=Network for Education and Research on Peace and Sustainability）の認定を受け、超学際研究「Peace

and Sustainability」の推進、本学独自の評価指標を活用した SDGs 貢献度の可視化事業など、特色あるさまざまな取り組みを行っています。

中でも広島大学が重点的に取り組もうとしている社会貢献課題が、地球温暖化問題です。

アリゾナ州立大学が提唱し、同大学と地元テンピ市とがここ数年ともに大きく発展する基盤となった「Town & Gown 構想」(Town (地域住民や地方自治体) と Gown (大学) が協働) を本学と東広島市にも導入して、大学、自治体・地域住民、企業とともに、まず最初にキャンパス周辺のカーボンニュートラルやスマートシティの実現に努めます。

広島大学は 2021 年 1 月 26 日に、2030 年を目標とする「カーボンニュートラル×スマートキャンパス 5.0 宣言」を行いました、こちらがその連携と取り組みの概要です。広島大学は 2030 年までに、通勤・通学を含めたキャンパスで使うエネルギーのカーボンニュートラルを実現します。また、2030 年までに、高規格 5G ネットワーク網を基盤とした Society5.0 を実装したスマートキャンパス 5.0 を実現します。

このように SDGs に向けて取り組んでいる成果として、タイムズ・ハイヤー・エデュケーションが大学の社会貢献活動を国連の SDGs の枠組み使って可視化した「大学インパクトランキング」で本学の国内順位は、2019 年の 4 位から、今年は 1 位にランクインいたしました。

グローバルなインパクトを念頭に置いた本学の SDGs へ果敢な取り組みは、「100 年後にも世界で輝く大学」を目指す我々の歴史の中に刻まれ、新たな記憶を形成していくことに間違いありません。

本日の講演の最後として、再び、原爆の記憶に目を向けましょう。

バラック・オバマ氏が現職の米国大統領として初めて被爆地広島を訪問したのは 2016 年のことで、記憶にも新しいところです。

現在の広島大学工学部出身の被爆者として核廃絶に尽力し、オバマ大統領と広島平和公園で握手し言葉を交わした坪井直さんが 10 月 24 日に 96 歳で生涯を閉じられました。

オバマ 米国大統領を被爆地広島へと導いたのが当時外務大臣であった岸田文雄氏です。岸田氏は、今年 10 月 4 日、日本の第 100 代総理大臣に選出され、その所信表明演説(10 月 8 日)で、「被爆地・広島出身の総理大臣として私が目指すのは『核兵器のない世界』です」と訴えました。広島大学は、同じ広島の思いを胸に、平和を希求し続けなければなりません。

本日の講演でお話してきた通り、記憶を更新し続けるという作業こそが、広島大学が広島大学であるための必須条件であり、それ自体広島大学のミッションの一部です。

ともに平和というコンセプトにアイデンティを持つ、広島とミュンスターという世界の異なる地にあるミュンスター大学と共に過去の記憶を継承し、新たな取り組みの記憶を創生する覚悟であります。

今後とも皆様のご支援、ご協力をお願い申し上げます。